旧制松江高等学校教師

カルシュの足跡を追って

◇17◇

――若松　秀俊

学問と著述（中）

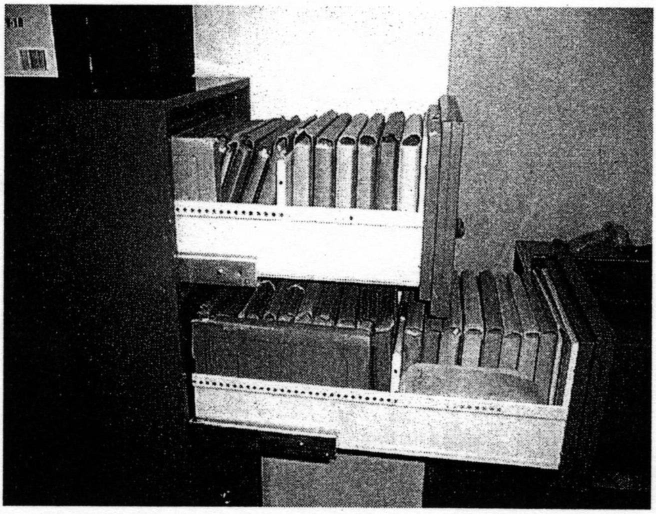
行動的人智学者として

カルシュ博士の未発表の研究は、哲学史と人の意識の進化に関することである。ドイツ旧字体による記述と書き込みのために、解読困難であるが、現在まで千㌻余りを解読済みであり、古代のインド、中国、ギリシャの哲学、および初期のグノーシス説（Gnosticism）に関しては、ほぼ整理できた。現在、長女メヒテルトが引き続き整理中である。カルシュはルーズリーフの形ですべてを書き綴り、一冊当たり約四百㌻のファイルブック三十七冊が現存している。

敗戦時の混乱により、彼は軽井沢で一九四五年に自らの執筆をやむを得ず停止した。ドイツ帰国後も、生活のために種々の仕事に追われたこともあって、残念ながら日本に関して十分な学問的つながりを保つことができなかったようだ。彼は自分が通じていた事項についてまとめる作業をせずに、逆におびただしい数の追加や訂正を書き込んだ。

全体に流れる彼の意図は、有史以来、人の思考がどのように変化してきたのかを示すことであった。カルシュが禅と西田哲学に大きな興味を抱いていたことを彼の残した文書中に見い出せるものと確信できるし、彼がどこから日本の哲学に入って行ったのかをも明らかにできるはずである。

フリッツは自分の仕事の中で、人の思考がどのようにして今に至ったかを論述し、また学問や内的修練を通して、シュタイナーが唱えた新しい思考にいかにして到達できるか、を示そうと努力した。人が直接知ることのできる肉体的なものから、ひとの知識ではない、しかし接近可能である、形而上学的な「人の信念」に大胆に彼が入り込むことによって、見い出したものが彼の哲学であろう。また、彼の仕事は、シュタイナーの哲学とカント哲学との関連を示そうとしたことにも見られる。



長女メヒテルトの自宅に保存されている一万五千㌻にのぼるカルシュの遺稿

フリッツは自らを称して行動的人智学者であり、シュタイナーの「精神科学」を世に広める教師であると言っていた、とのことである。それゆえ、彼は自分の子供たちにも基本的な哲学的思考法を真剣に伝えた。

長女メヒテルトは人智学とシュタイナーの哲学的洞察法の、いわば一人の「生徒」であった。そして、現在のメヒテルトの主な仕事は、人智学のドイツ語のテキストや文献を英訳することである。

戦後ドイツに帰ると、二女のフリーデルンはマールブルクの自由ヴァルドルフ（Waldorf）学校に通い、マールブルク大学で政治学と地理学の二つの学位を取得し、同じ自由ヴァルドルフ学校の教員になった。

この学校は日本では「シュタイナー学校」として知られており、今の日本の教育論議と関連して、このシュタイナーの全人教育には、教育理論の応用としての興味深いものがある。

（東京医科歯科大学大学院教授）

＝文中敬称略＝